

## 2010年 秋期 保護者会資料 Contents ー目次ー

ご挨拶	..... P.2～P.5
国語科より	..... P.6～P.12
数学科より	..... P.13～P.23
英語科より	..... P.24～P.35

## ご 挨拶

大学受験グノーブル 代表：中山 伸幸（英語担当）

本日はお忙しい中、ご参加いただき、誠にありがとうございます。

各学年の保護者会においては、クラスの現状や課題、今後の予定や留意点などをお話しさせていただきましたが、本資料では、グノーブルの塾としての姿勢について述べてまいります。

現代社会の急激な変化の中、塾を取り巻く環境もますます厳しさを増しています。教育理念よりも経済理論を優先させるかに見える動きもありますが、私たちは、生徒たちが志望大学に合格できる盤石な実力をつけることを主眼とします。それと同時に、大学進学後に備えた素地を整えること、若者の持つ心の中の「火」（＝意欲・好奇心）を無味乾燥な受験勉強で消さないことも、受験指導に携わる者の姿勢として大切にしていきたいです。

さて、大学進学塾として、私たちはこれまで教材開発や授業力の向上に努めてきました。そして、卒業生たちも大いに活躍してくれています。

右の表は、グノーブル1期生から4期生までの健闘ぶりです。私たちは合格者数の多さを第一に追いかける塾ではありませんが、生徒たち一人ひとりの進学には大変気を遣っておりますし、その成果は誇らしく思っています。

合格実績	卒業生総数	東大+国公立慶医	早慶上智
2010年 4期生	307名中	102名合格	328名合格
2009年 3期生	271名中	96名合格	229名合格
2008年 2期生	232名中	78名合格	257名合格
2007年 1期生	187名中	52名合格	163名合格

なお、2010年卒業生の「生の声」や私たちの指導方針を、YouTubeでもご覧いただけるようにしました。6月以降現在までに、1本あたり3分～10分の動画を23本用意しております。すでに累計で9千件を超えるアクセスをいただいております。グノーブルの生徒さんからも、保護者の方といっしょに楽しんだという声を聞いています。まだご覧いただけていない方は、お時間がございましたときにぜひ、右のサイトにお立ち寄りください。（[www.gnoble.com/gtube/](http://www.gnoble.com/gtube/)）

また、保護者の皆様とグノーブルの架け橋として、「グノレット」という小冊子を、9月以降ほぼ隔月のペースで発行していくことにしました。ティーンエイジャーともなりますと、家ではあまり塾のことを話さないかもしれません。親と距離を置くことは、将来の自立への準備として大切な過程ですが、グノーブルでどんな授業を受けているのかは、保護者の皆様も気になるころだと思えます。「グノレット」を通して、グノーブルの授業の様子をはじめ、担当者の紹介、グノーブル卒業生からのメッセージ、お役に立てただけそうな情報などを、継続的にお伝えしていく予定です。

「グノレット (Gnolet)」という冊子名は、塾名と let を組み合わせて作りました。let は、leaflet、pamphlet などの語尾でもあり、また、letters from GNOBLE という意味をかけたものでもあります。

※現在2号まで発行しています。創刊号は「中学生の英語・数学」、最新号は「新高3生応援」を特集しています。お持ちでない方、また、お知り合いにお渡しいただける方は職員にお声掛けください。

学習環境面も、少しずつ改善してきました。今春には、渋谷校舎を、より駅に近く、より安心してお通いただける場所に移転しました。開講学年・科目も格段に増やし、受付も開設しました。また、駅から遠く手狭だった新宿2号館は廃止し、その代わり、9月より新宿1号館の5階、6階に合わせ、4階も教室使用を始めました。これにより、駅から至近な場所にさらに多くの教室を確保できました。合わせて5階のトイレ増設工事も行いましたので、4階から6階まで女子トイレを2ブースずつ用意できました。まだまだ改善すべき点は多々ありますが、今後も学習環境を整える努力をまいりますので、長い目で応援していただければ幸いです。

### ◆時代の求める学力

先日（体育の日）、今年卒業した東大生二人が遊びに来てくれました。授業までの数十分間、久しぶりに楽しく話をしました。

「これから変わるかもしれないけれど…」と前置きしながらも、一人は「癌治療に携わりたい」、

もう一人は「外来生物の問題に対処していきたい」と、二人には理系を選んだ明確な理由がありました。癌はその種類によっては、早期発見が非常に困難な上に進行が早く、生存率もとても低いものがあります。また、生物多様性が注目されている現代にあって、在来種への脅威になる外来生物の問題は取り組みが大変困難です。それぞれ人類や環境にとっての大問題であり、それだけに、とてもやりがいのあるテーマだと思われそうですが、二人が口を揃えるように言ったのが、「考えなくてはいけない分野が広い」ということでした。

癌治療は、病巣の加療にとどまりません。治療に当たっては個人の死生観をも考慮する必要があり、治療による延命は広く高齢化社会の問題にも関わります。外来生物の問題も、政治や法整備はもちろん、個人の価値観にも関係する上に、国境を越えた取り組みを必要とします。「今の時代は幅広い考え方が本当に大切だし、その意味では東大はとてもいい」というのが二人の意見でした。

東京大学では入学したすべての生徒が、1、2年生の間は教養学部(人文科学、自然科学、社会科学を包括する一般教養)に身を置き、リベラル・アーツ(人文科学、自然科学、社会科学を包括する一般教養)の教育を受けます。東京大学の教養学部は長い歴史を誇りますが、これは、「専門教育は広い知識と見識の上に立たなければならない。そうでなければ、単なる技術教育になりさがる」という前提に立ってのことだそうです。

また、最近では多くの大学が、専門に限定されないという意味でも、国際交流という意味でも、幅広い教養・視点を学生が身につけられることを特長の一つに掲げるようになってきています。

遊びに来てくれた東大生二人は、うれしい感想も伝えてくれました。「グノーブルの英語では毎回、本当に教材が良かった。今思うと、東大のリベラル・アーツ教育の先取りをしていた」と言ってくれたのです。

グノーブルでは、単に英単語や構文の説明に終始するのではなく、多岐の分野に渡る良質な英文をたくさん選んでいます。授業時にはその英文の背景も分かりやすく解説するように努め、生徒の皆さんに、さまざまな人間の思考や心理、現代人として大切な知識、今の話題などに、英語で触れてもらいたいと考えています。

「興味のわく英文を読みながら英語を学ぶ」、というグノーブルが大切にしている姿勢は、しかしながら、あまり一般的なことではないようです。英文に向かうときに、もっぱら語彙や構文解析を気にする風潮が、教育現場では今でも圧倒的に多いようです。

これまで、語彙も豊富で文法力も申し分がないのに、英文の表面的な意味しか把握できない生徒たちをたくさん見てきました。練習問題では、一応高得点を取れるのですが、筆者が誰に向かって何のためにこの英文を書いたのかをほとんど理解できず、そもそも、そのようなことを気にも留めないのです。

私たちは、このような生徒を育てる教育には大いに疑問を持っています。英語は言葉であり、その言葉を使って知識・経験・情報などを伝え合うことが大切なはずで、例えば技術家庭の授業で、ある道具の仕組みを習ったとしても、その道具を使えるようにならなければ授業の意味は半減です。膨大な情報が英語で駆け巡るこれからの世の中において、その情報を英語のまま理解し、効果的に活用する能力を身につけることは、明らかに知的な人間の必要条件でしょう。

#### ◆正しい伝言ゲーム

上位学年の授業で要約問題を重視しているのも、英語を単なる受験科目に終わらせたくないからです。英文を文法的に解析することよりも、その英文のメッセージを正しく受け取って解釈する力は、若者にとって大切な能力だと確信しているからです。

グノーブルで扱う要約問題は、東大の出題形式にも合わせてあるのですが、1~4 個程度の段落から成る英文の内容を数十字の日本語でまとめてもらおう、というもので、これは「正確な伝言ゲームをしよう」ということです。

「伝言ゲーム」というのは、数人の人が一列に並び、最初の人(伝言者)が次の人の耳元でこっそりメッセージをささやき、それを次々と伝えていくゲームです。ときにはまるで異なる情報に変わってしまい、大笑いすることになりますが、正確な伝達が必要となる場面では笑い事ではすまされません。

相手の言いたいことを誤解も曲解もせず正しく受け取り、その受け取ったことを第三者に正しく伝える能力というのは、高等教育の最も大切な基礎技術のひとつです。この基礎の上に、解釈・分析・批評・応用・発展があるわけです。

さて、要約問題は、和訳問題と違って多少知らない単語があっても取り組みやすいことも手伝って、どの生徒も意欲的に問題に向かってくれます。しかし、グノーブルの授業にまだ慣れていない生徒たちの出来は概して良くありません。全体を踏まえた上で要旨を見抜くことがなかなかできないのです。解説のときに「この文は誰が、誰に向かって書いたと思いますか？」という、大きな視点に立つことを促す問いかけをすると、ハッとした顔であらためて真剣に問題を読み直し始めます。

多分、そうした生徒たちは、一文ずつ文法的に正しく読むことに懸命で、全体を観るところまでは至らなかったのでしょう。私たち教える側は、うまく生徒たちを導いて、語法や文法一辺倒の視点から解放してあげることが使命だと思います。もちろん、語学の習得では文法学習は重要です。しかし、いつまでも「この関係詞の先行詞はこれで、この動詞はこの前置詞といっしょに使うときは〇〇という意味の熟語だから…」という思考をしていたのでは、少しでも長い文章になると筆者の主張や論点を把握するどころの話ではなくなってしまいます。

言葉は誰かが誰かに何かを伝えようとしているものです。生徒たちが英文を読むときに、その何かをつかんで、「この考え方はすごく参考になる!」、「あの出来事の背景はこうだったんだ!」と思えるような経験を重ねれば、「次はどんな英文に出会えるんだろう!」と、英語の授業は目が輝く場になるはずです。私たち教える側としても、生徒たちが「おお、面白い!」と思える教材を用意し、授業に臨みたいと思っています。それだけ苦勞は伴いますが、喜びも大きなものになります。

#### ◆将来につながる受験勉強に

今月ノーベル化学賞の受賞が発表された際、会見に臨んだ根岸英一氏は「私は日本の受験地獄の支持者だ。高度な研究になればなるほど、基本が大事になるから」と語ったそうです。大学受験に携わる身としては思わぬ援護をいただいたようで嬉しくもあるのですが、この発言を振りかざして生徒たちに丸暗記型の勉強をただ押しつけるのは、やはり間違っていると言わざるをえません。

私たちが指導しているのは、中学生と高校生です。子供から大人へと成長し、自分と向き合いながら、同時に社会意識も芽生えて行く過程にある十代の若者です。純粹さ、正義感、探求心などを失っていない存在です。(同時に、易きにつきやすく、誘惑に対して強くない年代でもありますが、それはまた別の話です。)

そんな生徒たちへの受験指導は、まずは大学受験で成果につながるものであるべきなのは当然です。しかし、「一流大学に入りさえすれば後は順風満帆」という時代がすでに過去のものとなった今、そこだけを目指にはできません。これからの社会で生きていく力、活躍する力に繋がる勉強でなければ、その貴重な時間とエネルギーを使う意味がないと思います。また、一流と言われる大学の入試問題も、今では大きく変わってきていることにも留意すべきでしょう。

グノーブルでは、現在、国語・英語・数学の3教科を開講していますが、この3教科はいずれも、グローバル化に伴い複雑化する現代においては根幹となる科目です。

国語は、思考の土台、コミュニケーション能力の土台です。日本人であれば日常の会話に不便はないはずなのに、なぜ小学校から高校までの12年間、学校でも塾でも国語を勉強するのかといえば、知的で高度な内容を言葉で論理的に扱うためには、使い慣れているはずの母語であっても言葉の力を磨く教育が大切だからです。

英語は事実上の世界共通語です。経済界であろうと、科学界であろうと、どのような分野においても、世界と付き合っていくためには英語は欠かせません。また、日本語以外のロジックを学ぶことは人間としての幅を広げる上でも大切です。

数学もまた、理解、思考、コミュニケーションの必須な道具です。自然現象の研究・開発・利用に限らず、現代では経済面から社会現象を把握するためにも数学は大切ですし、複雑化する現代の諸問題の解決策を考える上でも数学的論理思考は欠かせません。

ところで、今話題になっているマイケル・サンデル教授のハーバードでの授業をご覧になられた方も多くいらっしゃると思います。サンデル教授がすばらしい先生なのは衆目の一致するところでしょうが、あの白熱授業には、学生の側の教養と論理思考力も欠かせません。哲学科の講義ではなく、一般教養の授業であるにもかかわらず、学生たちには、事前に何冊もの古典、たとえばアリストテレス『政治学』、ジョン・ロック『統治二論』、イマヌエル・カント『道徳形而上学原論』、ジョン・スチュアート・ミル『功利主義論』、ジョン・ロールズ『正義論』などを読んでからの参加が課せられているそうです。そして、教室の中では、サンデル教授の日常に根差す哲学的発問に、学生たちは即座に思考を組み立てて発言します。それを受けてサンデル教授がさらにアグレッシブな問いかけを…という進行です。教養の蓄積を踏まえた、真にインタラクティブな思考訓練が展開されています。

こうした実戦的で高度な授業を「海の向こう側の話」と割り切って、旧態依然の受験教育を続けることは、もはや時代が許してくれません。一流の大学を目指すためには、中学高校の段階でどのような素地を身につけることが必要なのか、私たちは真剣に考えずにはられません。

#### ◆教学相長 rev. 2.0

『麻布でも高3になって通い始めたという友達が急に増えました。それまで僕一人かなと思っていたら「お前も行ってるの？」みたいな。去年の結果が出て「この塾すごいな」という噂が広まった感じです。合格結果だけでいけばグノーブルより大勢合格している塾はありますが、あれはみんな規模自体が大きい塾ですからね。割合でいえばグノーブルはすごい。そのあたりはみんな感じているんじゃないでしょうか。』(2010年「合格者の声」p.5)

もし、この卒業生からいただいた嬉しい言葉通りに、グノーブルにすごいところがあるとすれば、その秘密のひとつは、やや拡大解釈した『教学相長』に通じる姿勢にあるのではないのでしょうか。

五経のひとつである「礼記」には『教学相長』（きょうがくあいちょうず）という言葉があつて、その意味は「人に教えることと師から学ぶことは相補い合うもので、両方を経験してはじめて学業も向上する」と、手元の大辞泉には出ています。

この意味を少し改変 (revise) して、「教える側と学ぶ側の優れた相互作用は、双方を大きく成長させる」としてみるのもいいのではと考えています。もし、指導する者の情熱と、学習者の意欲がひとつの教室で出会えば、その効果は化学反応を起こして、1+1 が3にも4にも、それ以上にもなり得るでしょう。双方の主体性から夢中になれる環境が生まれ、素晴らしい成果が期待できます。

次の言葉も今年の卒業生の感想です。

『グノーブルの先生方には「教えてやってる」という上から目線はまったくなくて、先生方はいつも「一緒に頑張ろう！」という感じで向き合ってくださいなんです。それから、私は秋好先生に習っていましたが、先生はとてもお忙しいのに一人一人に本当に親身でした。私の場合も直前期に医科歯科の問題を8年分解いて、それをすべて秋好先生に見ていただき添削していただきました。わざわざワープロで詳しく解答・解説を打ってくださったり、「君はこんな風に考えたから間違えちゃったんだよ」ってことまでアドバイスしてくださったりで、とても感謝しています。』(2010年「合格者の声」p.14)

実は、私もグノーブルの1期生たちと、彼女たちが受験を迎える直前に次のような会話をしたことがありました。

「先生って、どうしていつもそんなに元気なんですか？」

「えーと…。あっ、わかりました。皆さんからエネルギーをもらっているからです！」

「え！？ 私たちこそ先生からエネルギーをもらっているんですよ。あ～、その相乗効果で授業が楽しいんですね！」

これからも、生徒たちの役に立てますよう、職員一同、力を尽くしていく所存です。そのためにも、保護者会後には、皆様からの貴重なご意見をお聞かせ下さいますようお願い申し上げます。

国語科・数学科・英語科としてのスタンス、指導方針に変更はありませんので、以下の資料は、原則昨年と同様の内容となっております。

## 国語科より

国語担当：行村 真治

### 1 はじめに

「〇〇さんは国語ができる」

このように人から評される方は、どのような方でしょうか。授業で生徒の方に聞いてみました。出てきた意見は、「読解力がある」「本をよく読んでいる」「ものをよく知っている」「背景をつかんでいる」「文章力がある」などなどです。どれも正解だと思います。しかし抽象的であり、学ぶ生徒にとっても力がついたと実感しづらい項目が並んでいます。

さらに、ここには重要な点があります。実はこれらに該当していても「国語ができる」と言われない場合があるのです。現実的な発言ですが、一つ当然すぎるにもかかわらず、見落としがちなポイントがあります。

現実問題として、国語のできる方とは「テストで点が取れる人」、しかも「安定して点の取れる人」ということになると思います。なお、出題範囲が限定されていて、授業内容を踏まえて書くことで点の取れるような、学校の定期テストは、ここでいうテストではありません。過去、解答欄を埋めてさえいれば0点とはならないという定期テストがあったと聞いたことがあります。それは「励まし」にはなっても、本人のためになるとは全く思えないと感じました。やはり、未知の文章を読み自力で正解となる解答を出すことが求められるテストを対象にして考えたいものです。

では、安定して点が取れる人とはどのような方でしょうか。逆に考えると、点が思うように取れない場合、原因はどこにあるのでしょうか。

その前に、まず国語という科目の特徴を考えておくべきだと思います。

### 2 「国語」のとらえ方

国語という教科はその特徴から以下の2種類に分けられると考えています。

#### ①鑑賞の国語

「味わう国語」「感性を磨く国語」とも表現できるでしょう。実際に文章を読み、その奥に秘められたもの、すなわち行間をとらえ、味わう力を養うような国語です。

ただ、この力を養うことは教養の範疇に入り、受験に直接的に役立ちません。逆に「行

間を深読みする読み方が文章の読み方なのだ」と勘違いしてしまい、得点力が安定しない状態に向かってしまう恐れもあります。子供の頃本を読むのが大好きで活字に親しんでいたにもかかわらず、中学高校で、特に大学受験において得点が取れない方は、国語について、ここでいう「鑑賞の国語」を国語の全てと考えてしまい、次にあげる②をあまり意識できない場合があるのではないかとというのが自分の意見です。

ただ、特に一貫校に通っている方にとって、中学時代は「鑑賞の国語」に親しむことも大切だと思います。大学受験には直結しないのですが、国語という科目に親しみ、言語による表現を豊かにし、ひいては精神生活を豊かにするためにも「鑑賞の国語」は重要な位置づけにある科目と思います。グノーブルのカリキュラムでは「鑑賞の国語」も重視します。

(参考)

中学生の授業内で、問題文に「考察しなさい」と表現してあるものを時々設けています。これは「鑑賞の国語」に属する学習だというメッセージです。本文には根拠が明確に書かれていないが、このような味わい方も可能だということを提案してある問題だと考えてください。

## ②情報処理の国語

いわゆる「受験国語」と表現できます。国語の読解問題において、課題文の前に必ず「次の文章を読み、後の問いに答えなさい」というような表現が、書かれています。これは、「本文に書いてあることだけを根拠にして問題にあたりなさい」、あるいは「本文に根拠を見いだせない問いは決して出しません」というメッセージであると理解すればよいと思います(次の項目でもう一度整理して説明します)。ここで注意すべきことは書かれていないのに「きっこうこういうことだろう」「確かこのようなことが書いてあったはずだ」と曖昧に想像力を広げて設問にあたってはならないということです。受験問題を解く上で必要なのは「書かれてあることのみを手がかりにして、聞かれていることのみで答える」ことです。正確な情報処理能力が求められているのです。そうすると上記①の力が十分に備わっている方にとって、実は受験問題において求められていることは「浅い」内容にとどまっていると気づき、物足りなく思えるかもしれません。しかし、そもそも言語とは、書いてあることを正確に読み、それを手がかりに情報処理するという一面がなければなりません。

「書は言を尽くさず、言は意を尽くさず」

確かに「書」、つまり書かれたものは全てを語りきってはいないのですが、情報処理にあたっては、やはり「書」を情報の全てと考えておきたいものです。まず、「相手(作問者)が求めているものを、求められているだけ提供する」という、情報処理に徹した答え方が大切なのだということを意識しましょう。

以下、「情報処理の国語」について述べます。

### 3 「情報処理の国語」を学ぶ上で意識したいこと

さて、では改めて実際にどう学べば良いか、考えてみます。

前の項目にも挙げた内容で、また、過去誰もが見たことのある表現でしょうが、

#### 「次の文章を読み、後の問いに答えなさい」

国語の読解問題冒頭に必ず書かれている内容です。実は、国語の学習に必要なことの全てが、実はここに示されていると思います。表現の前半と後半に分けてその意味を考えてみたいと思います。

##### ・「次の文章を読み」

つまり、正確な「文章理解力」です。

決して「次の文章を読まないで」と書かれることはありません（当然です）。よって、文章内容を正確に理解することが前提となります。

この部分でつまずいてしまう原因（つまり何をしなければならないのか）

- ①語彙力の不足。
- ②物事についての常識・背景を理解が蓄積されていない。
- ③文法が定着していない。（古典分野のみ）

以上の3点について力をつけねばなりません。①と②は実感がわきづらい項目ですが一つ一つ積み上げましょう。①の充実のために必要なのはやはり質の高い活字（言語）に触れる量ということになります。②は非常に重要です。「論点の把握」とも表現できますが、評論系の文章を読むときに、論点を知っていること、つまり、現在どのようなことについてどのような意見があるのかは理解を積み重ねておきたいものです。受験における評論文は時事的な内容を踏まえた文章も目立ちます。日々のニュース等に興味を持つという考えも必要です。③について重要なのはコツコツと「やらない」ことだと考えます。時間を区切って一気に全容をつかみ、定着のために実際の文章に触れながらチェックを繰り返し定着を図る、という形式をお勧めしています。文法学習のみコツコツやっていたのでは、正直無味乾燥なつまらない学習に陥ってしまいます。あくまで実際の文章に触れていき、現段階で何が足りないか、何をすればよいかをチェックしながら学習を進めたいものです。

まず読んでみる



よくわからなくて困る



何を参照すればよいか、何を調べれば解決するかわかる



反復する中で定着する



幼児に対していきなり補助輪無しで自転車に乗るのを強要するような乱暴な提案に見えるかもしれませんが、未知の文章を読む上での心構えも養成でき、受験問題に対するときにも役立つと考えます。

### ・「後の問いに答えなさい」

つまり正確な解答能力です（高校の現代文授業において、記述問題では、解答の「構成能力」と表現しています）。

問いに答えなくてもよいという出題はあり得ません（当然です）。かならず、求められていることに答えなければなりません。実際にテストにおいて国語ができるということの核心部分はこちらです。与えられた文字情報（つまり文章）を正確につかむこと、つまり「次の文章を読み」に対応する部分では、文章の「執筆者との対話」が求められています。しかし、この段階で求められているのは「他の人物との対話」です。すなわち「作問者との対話」そして「採点者との対話」です。よって、作問者が何を求めているかは当然ながら問題文を正確に読めばわかるのです。そこから作問者が示したサインを見抜くことも大切です。たとえば文章中の傍線部について「どういうことか」と聞かれていたらそれは単なる傍線部の解釈でしょう。情報処理的に本文の適切な箇所をチェックしたうえで傍線部を分析的に解釈、換言していけばいいことになります。しかし「どういうことと考えられるか」と表現してあったら、「本文にそのまま答となる内容は書いていないですよ」と伝えたいのだ、と考えるべきでしょう。良問では高精度でメッセージが示されているものです。見落とさないようにして取り組みましょう。

設問にあたる時常に意識したいことは

①設問趣旨を的確につかむ。

\*本文から手がかりを十分に拾う。

②記述問題のためにも表現力を充実させる。

特に、設問趣旨の把握と、手がかりを拾うプロセスを重視したいものです。「次の文章を読み後の問いに答えなさい」と書いてあるのだから、文章中から手がかりが見つからないことはあり得ないのだと考えて取り組みましょう。

ここまでアドバイスとして、意識していただきたいことを提案してきましたが、実際には苦勞している方が多いのも事実です。その現状を把握して差し上げて、具体的なアドバイスができればと思っています。

授業で生徒の方と触れる中で、苦勞されている方のタイプがいくつか思い当たります。

① 代入型

特に古文に多いのですが、学んだことをそのままあてはめているだけのタイプです。

「点」で読んでいて、「線」すなわち文脈から手がかりを拾って運用する力が養われていな

い方です。一例を挙げると、古文単語「聞こゆ」には様々な意味がありますが、出てきたらとにかく「申し上げる」と訳してしまうようなタイプです。他の部分に敬語が出てきていないのだから、ここだけ敬語が用いられるわけではない、という全体から手がかりを見つけて考察する「視野」を養成してほしいと考えてアドバイスに努めています。

## ② ミステリアス型（免罪符型）

「やっても無駄」「やっても伸びない科目だ」と位置づけるタイプ。そうすると努力しなくても良いことになってしまいます。たしかに、特に現代文はすぐに実感がわきづらい科目でしょうが、やっても伸びない科目だったら、そもそもテストに出すべきではありません。芸術的な素養のようなものを求める科目ではないと考えておきたいものです。そもそも国語がテストの科目となっているのは、採点できる要素、得点化できる要素があるからです。つまり、情報处理的な要素があるのです。いいわけを作らずに取り組んでほしいと切に願います。

過去の生徒さんから考えるに、実際、大学受験において全教科が万全の状態で大番に臨む方はきわめて少数だと思います。そうなる手があまりまわらない科目が出てきてしまうものです。特に理系に進む方はそれが国語となる場合も多いでしょうが、特にセンター試験のような情報処理に徹する形式の問題に触れると、ミステリアスでやっても無駄な科目だという言い訳はできないと気づくでしょう。ある程度真摯に取り組むことは必要です。やって報われるから受験科目にあるのです。

とにかく、ただ漠然と「活字に多く触れて読解力を養いましょう」というようなアドバイスは、自分の学力向上が実感しづらく、学ぶ必然性も感じづらくなると思いますので極力言わないようにしています。授業においては、「なぜできなかったか、わかる」「何が分からないか、わかる」「何を調べれば解決するか、わかる」ということを各自に意識してもらい、今後の課題を明確化していただけるように努めています。

授業でお会いする方については、添削などを通してどの部分が不足しているのかをなるべく具体的にアドバイスするようにしていますし、それが使命だと考えます。この姿勢は堅持します。

\*以下は事務的な連絡なので常体で記します。

## 4 スケジュール

大学受験を念頭に置くと、現実的に考えて高3の段階で国語に手が回らないであろうというのが大前提である。よって、高3を迎える前の時期、高1～高2が極めて重要であり、

さらにその前にあたる中学生時代の『鑑賞の国語』学習も重要と考えている。

今年度については、「鑑賞の国語」にじっくり取り組む最後の機会としての中3、古文を読むために必要な前提事項をおさえ、読む力を徹底、定着させる高1、現代文における解答能力を養成する高2というスケジュールを提案している。高3でも講座は開講しているが、そこでは、前提たる「読み方」「解き方」が確立しているという前提に立って、演習に徹するため、やはり「その前の時期」が重要だと考える。

先日、10年連続200本安打という大記録を達成したプロ野球イチロー選手について「練習の練習に余念がない」と評するコメントを読み感銘を受けた。

高3前にいかに状況を整えておくか、これである。

## ①中3

### 古文

これまでの学習を踏まえ、学習内容がいかに定着しているか確認しつつ、今後の課題も同時に自覚していただけるようにしている。具体的には「大鏡」「枕草子」「源氏物語」などを題材に、全訳演習を通して、どこが分からないのか、何を学べば解決しそうか自覚していただくようにしている。今年度は今後の財産となる「名文の暗誦」も重視した。生徒の皆さんの取り組み方は予想以上に良かった。

### 現代文

中島敦「山月記」、芥川龍之介の「舞踏会」、森鷗外の「舞姫」などの作品を読み、「鑑賞の国語学習」を楽しみながら、同時に「情報処理の国語力」も充実していただけるように努めている。

## ②高校

前述した内容であるが繰り返すと、当塾に通っていただいている方を、過去に担当させていただいた方も加えて考えると、圧倒的に国公立大を目指す方が多い。そうなると、高3では国語にじっくりと時間を費やすことは現実として難しい方が多いということになる。グノーブルでは高3の国語も開講するが、これはあくまで「国語の問題にあたる場を提供し、解く感覚が鈍らないようにすること」が目的であり、体系立てて基礎から解説する授業ではない。

高1から高2までの間に、国語という科目について学習法を確立してほしいと考えている。

### 古文

基本的な文法事項を学び、さらに演習の中で定着するのには1年間と決めて集中的に学んでいくことを提案している。特に理系の方は高3時点で基礎から学ぶ余裕はないと思わ

れる。原則高1で全体像を把握できていて、あとは単語力を充実させながら受験問題にふれて得点力を養うことのみで上の学年にあがってほしいと思っている。

グノーブルのカリキュラムでは中学生の段階で受講した方に対しては一通り全ての必要事項を学習して高校生を迎えることになる。これは、一貫校全般に当てはまるスケジュールといえる。高校受験を経て高校に進学した方にとって、追いつくためには高1時点の学習が極めて重要だと思う。過去、高1で、レベル分けしたクラスの上位を担当した経験があるが、8～9割程度は高校受験を経ていない一貫校の方だった。

いずれにしても、スケジュール的に言うと高1で古文をしっかりとっておくというのは理にかなっていると確信している。

## 現代文

得点力の充実に特化した授業を行っている。ここでは例として選択肢問題について述べてみる。授業で、以下の手順を徹底できるようにと提案している。

- ①設問趣旨をつかみ、
- ②正答に至るための手がかりを探し、
- ③どういう答が正答として提示されうるかある程度メド立てをし、
- ④各選択肢の要素を吟味し、
- ⑤先入観を入れず無難なものを選び、
- ⑥見直す。

記述問題については、上記の①～②は同様であり、そのあと適切にまとめて行くことができていないかを各自の作成答案を添削しながらアドバイスするようにしている。

いずれの形式においても、「正確な言語的情報処理能力の確立」を目指している。

## 1. 指導理念について

### 物事を論理的に考えられ、自分の力で問題を分析し、解決する能力を身につけてもらう

私たちは、常にこのことを考え授業に臨んでいます。

皆様に第一志望の大学に合格できる力をつけていただくことはもちろんのこと、大学生、社会人になってからも役に立つものの考え方、見方を身につけていただきたと考えているからです。

そのために必要な力とは、「基礎力」「表現力」「実践力」の3つです。

#### ① 基礎力：数学における基礎知識について正しく理解し、計算できる力

問題を解く上で必要となる知識（計算法則、定理、公式）を、ただ丸暗記するだけではなく、「どうしてその計算法則や定理、公式が成り立つのか」の証明や類題演習を通して、しっかり考えることで、「使える知識」として吸収していただくことが大切です。

GNOBLEのテキストは単元別に細かく分冊されており、授業を受け復習することで、単元ひとつひとつの知識を確実に定着させることができるように作られています。

さらに、重要単元は繰り返し学習できるようにカリキュラムが組まれています。

#### ② 表現力：自分の考えを正しく表現できる力

実際の入試で得点するためには、自分の考えをしっかりと採点者に伝える力、つまり表現力が必要です。この表現力を養うためには、答案を第三者にしっかりと添削してもらうことが不可欠です。

GNOBLEでは、宿題ノートに自分の考えを表現してもらうことや、授業中の発言や発表、授業中に行う個別添削を通して、早い時期から表現力を養う練習をしています。

#### ③ 実践力：問題を解く上で必要な知識を選択でき、それを組み合わせることができる力

各クラスの「基礎力」「表現力」を見ながら、担当者がクラスのレベルを判断し、最適な問題を選択して出題した応用問題をこなしていただくことで、実践力を養っていきます。

ここで大切なのが「あきらめず、自分の力で何とかしようという姿勢」です。内容的には難しい問題が多いと思いますが、問題が解けたときは自信がつかますし、たとえ問題が解けなかったとしても、いろいろ考えて解説を聴くのと、投げ出してただ解説を聞くのとでは数学力において雲泥の差が生まれます。

以上の力を養い定着させる為に、なるべく毎日数学に触れるようにしてください。

## 2. 授業の進め方

GNOBLEでは、より効果的に数学の力をつけていただくために、以下のような流れで授業を行っています。

**宿題の解説及び前回までの授業内容の復習** → **新単元の導入** → **演習** → **確認**

## ▼宿題の解説及び前回までの授業内容の復習

クラスや学年によって量は異なりますが、必ず毎回の授業で宿題を出すことにしています（ただし講習前の最終授業や講習中は除く）。宿題の目的は、授業で扱った基本事項が理解できているかの確認と、基本事項を踏まえての応用問題にじっくりと取り組んでいただくことです。解説が必要と思われる内容については、次回授業の導入時に解説を行います。

授業の導入として、宿題の解説や前回授業までの復習をすることによって、授業内容をよりしっかりと定着させることが出来ます。また、頭の準備運動的な意味合いもあります。

## ▼新単元の導入→演習→確認

新しい内容の解説をし、併せて演習を行います。演習を行うことで、解説した内容が正しく生徒に伝わっているか、また問題を解くにあたってその知識を正しく利用できているかを確認し、分かったつもりではなく、「真の理解」を目指します。

また、演習中に教室を回り、答案を確認することによって、個々の理解度を直接確認し、その理解度によって、その日の重要事項をしっかりと確認できる時間を設けています。

## ▼「ノートをとる」ということ

授業中にノートをとる際に重要なのは、きれいに書くことではなく、「解説された内容を後で自分が見て分かるように書く」ということです。

ただ板書をまる写しするだけではなく、難しいと感じたところは、口頭で解説された内容をより詳しく記入しておくなどの工夫が必要です。

## ▼宿題について

宿題も授業の一環であることを意識し、しっかりと取り組んでください。

中3までは宿題を提出していただき、チェック及び添削を行っています。宿題をチェックした結果、そのクラスに足りないものが自ずと見えてきますので、足りないと思われる部分については、授業内で復習する際に補うことができます。また、生徒自身も宿題をやることによって、自分に足りない部分を意識した状態で授業を受けることができ、より迅速に弱点を克服できるようになります。

宿題をやる上で大切なのが、分からない問題にも時間をかけて取り組むということです。

分からない問題にあたった時は、授業中にとったノートを参照するなどして、時間の許す限り、じっくりと問題に向き合ってください。しっかりと考えた上で解説を聞くことが重要なのです。

実はテストの時、点数に差がつきやすいのが、難問よりも基本～標準的な問題での失点であり、その問題をしっかりと得点源にできるかどうかは、宿題をきちんとやるかやらないかで大きな差がでるのです。

例えば、中学3年生のαクラスでは、必ず毎回10題程度の大学入試問題を宿題として

出しています。すると、1年間で約300題の大学入試問題を解くこととなりますので、1回1回の宿題を軽く考えていると、結果として大きな差が生じてしまうことになるのです。

#### ▼きちんと「出席する」ということ

学年が進むにつれて、一度の授業で扱う情報量も飛躍的に増えていきます。一度の欠席が及ぼす影響も、それだけ大きくなります。

まずは、安易に授業を休まないようにしましょう。

学校行事や体調不良などでやむを得ず欠席してしまう場合は、なるべく早い段階で担当講師に相談してください。

### 3. 中学数学から高校数学へ

中学数学のうちに是非、やっていただきたいことが、2つあります。

1つめは「計算力」を身につけるということです。高校数学では計算自体が複雑になる上に、立式をし、それを計算できることが当たり前に要求されますから、「しっかり正確に解ける力」が今まで以上に必要となります。また、問題に対して様々なアプローチを考える時間的な余裕も必要となりますので、「速く解く力」も必要となるのです。

この「計算力」は短期間で身につくものではないので、中学生のうちから計算問題演習を軽く見ることなく、正しく速く解くことを心掛けてください。

2つめは「数学的なものの見方を身につける」ということです。これは、最初に述べた3つの力のうち、「実践力」にあたる部分になるのですが、問題を解く時にどこに注目したらよいかを考えること、式が表わしている意味を考えること、出題者の意図をくみ取ることなどです。

基礎力をつけていくと、たくさんの知識の引き出しが出来ます。しかし、実際の試験で問題を解く時には、どの引き出しの知識を使ったらよいかをより迅速に、正確に判断することが大切です。高校数学の内容にはいると、身につけなくてはならない知識の量が圧倒的に増えます。その知識がひとつでも欠けると解けない問題が出てきてしまうため、高校数学では、まず、それぞれの知識をきちんと定着させていくことに、より多くの時間をかけていただきたいと考えています。ですから、比較的時間に余裕のある中学生のうちに、この「数学的なものの見方」「実践力」を身につけておくことが大切なのです。

もちろん高校数学でも「数学的なものの見方」を養うような問題は取り扱っていきませんが、中学数学のうちからこの力を養っておくことで、余裕をもって高校数学に臨むことができるでしょう。

次に高校数学を学習していく上で、意識して取り組んでいただきたいことを2つ紹介いたします。

1つめは「答案にまとめる」ことを意識するということです。

「答案を仕上げる」という力は、一朝一夕には身につけません。

高校数学に取り組み始めたばかりの時期には、「計算式の羅列」に終始する答案が数多く見受けられます。

まずは基本的な例題からでもいいので、実際に自分の力で、「数式だけではなく日本語を

用いて自分の考えをまとめる」ことに、意識的に取り組んでみましょう。そして、特に慣れていない段階では、なるべく添削を受けて第三者に“表現として適切かどうか”チェックをしてもらうように心がけてください。

2つめは「理由」にこだわるということです。

「ミスした理由」にこだわることで、ミスを防ぐための効果的な手法の習得や、自分のミスの傾向を把握することにつながり、ミスは減らせます。

そして「解けた理由」「解けなかった理由」にこだわることで、自分の解法だけでなく他の解法に対する視野が広がり、実践力が培われていきます。

また「減点された理由」にこだわることで、数学的に正しい表現や、自分の考えを採点者に伝える、という姿勢が身につけていきます。

#### 4. 大学入試における数学の現状分析

##### ▼センター試験

国公立大学の入試では、ほとんどの場合、センター試験と各大学独自作成の二次試験の合算で合否を決定します。また、順天堂大学（医学部）や早稲田大学（政治経済学部・商学部など）をはじめとして、私立大の入試においても、センター試験の結果を利用できる形式が多数あります。

センター試験は、下記のように毎年出題の大枠がほぼ決まっています。

##### ■ 2010年度センター試験・数学の出題単元と配点

	数学Ⅰ・A	配点	数学Ⅱ・B	配点
大問1	(1)数と式	20点	(1)指数・対数関数	30点
	(2)集合と論理		(2)三角関数	
大問2	2次関数	25点	微分法・積分法	30点
大問3	図形と計量	30点	数列	20点
大問4	場合の数・確率	25点	ベクトル	20点

※ 数学Ⅱ・Bについては、大問5：「統計とコンピュータ」（配点20点）、大問6：「数値計算とコンピュータ」（配点20点）とあわせて、大問3～6から2つを選択する形式です。

##### ■ 過去3年度平均点推移（大学入試センター試験公式サイトより）

	H.22年度	H.21年度	H.20年度
数学Ⅰ・A	48.96	63.96	66.31
数学Ⅱ・B	57.12	50.86	51.01

##### ① 数学ⅠAについて

例年、差が付きやすいのは、「図形と計量」「場合の数・確率」です。

今春のセンター試験の平均点が15点も下がったのは、この2単元の問題が難化したことが主な要因として挙げられます。



## ② 数学ⅡBについて

なんと言っても、時間が不足気味になりがち。毎年多くの受験生から「時間が足りない」という感想（嘆き？）を聞きます。処理速度が問われます。

一般に、特に関数分野である前半2つの大問については、対策を十分立てることで計算量の圧縮やスピーディな処理に特化することが可能です。

「数列」では現行課程で初めて“群数列”が出題され、「ベクトル」でも（より難易度の高い）“空間ベクトル”が4年連続で出題されましたが、典型的な出題が多かったため平均点は上昇しました。

「センター試験は、簡単なもの」「基本的に満点が取れるはず」という、甘い考えの生徒が毎年目立ちますが、二次試験の一般的な問題と比較しても、問題の難易度や計算量は決して劣るものではありません。

もともと数学という科目の特性上、ひとつの問題を解く（＝点数を得る）までにかかる時間がほかの科目に比べて長く、またひとつの問題の答えの数値を後続の問題で複数回利用する局面も多いため、一個のミスが大量失点につながりやすいという危険性を常に持ち合わせています。テストで一番失敗しやすい科目が数学といっても過言ではないのです。

受験直前期には、センター試験用にも十分な対策が必要であることは、早い段階で認識しておくべきでしょう。

## ▼二次試験・一般入試

一方で、国公立大学の二次試験や私立大学の一般入試で出題される大学独自試験は、試験時間、問題数、出題形式、難易度、単元の傾向など多岐にわたります。（別表参照）

出題傾向などは、突然変化することも大いにありえます（今春の日本医科大学などが好例です）ので、あまり早い段階から偏った対策を立てるのは得策ではない、と考えます。

一般的にどの大学でも高い出題傾向にある単元は、「整数・確率・数列」といった、個数の処理に関する単元と、「関数・軌跡・微積分」といった解析的な単元です。特に、理系の入試では「数Ⅲ微積分」は必須といってい良いでしょう。

また、センター試験のように大枠が決まっているわけではないので、「具体的にその問題を解くにはどの単元の知識を利用すればよいのか？」を、自ら選択することになります。さらには、複数の単元を融合させた問題も数多く出題されています。

つまり、各単元の学習を個別に終えただけでは不完全であり、融合問題への応用力を磨く訓練が別に必要です。

2010 年度主要大学・数学入試出題傾向

<国公立理系編>

大学 (試験時間)	ⅢC/全 問	2010 年度入試分析
北海道大 (120 分)	3 / 5	標準レベル・典型題が多く、高得点勝負は必至→時間配分がカギになる。今年も完答可能な問題を確保した上で、どれだけ部分点が稼げたか。 <b>頻出テーマ</b> ：行列、図形（今年は出題されず）、確率、数列、数Ⅲ微積分総合
東北大 (150 分)	2 / 6	主要大学にあって珍しく難化。計算量も多く、論証力も問われる、類題経験だけでは通用しないセット。完答があると大きなアドバンテージになったはず。 <b>頻出テーマ</b> ：数Ⅲ微積分、連立不等式と領域、行列、ベクトル、確率
東京大 (150 分)	2 / 6	“具体的事象” ⇔ “一般化・抽象化” の対応を問う出題は相変わらず。小問毎の飛躍も大きく、思考力（発想・着眼・設定）や、目的意識が試される。 <b>頻出テーマ</b> ：確率・数列・整数と論証、図形、求積問題
東京工業大 (150 分)	2 / 4	以前は数Ⅲ重視型だったが、07 年以降数Ⅲの比重が低下傾向に。解析能力重視から、論証力、思考力を問う出題に移行か。 <b>頻出テーマ</b> ：整数（特にガウス記号）、図形と論証、軌跡、数Ⅲ微積分、評価
千葉大・医 (120 分)	1 / 5	今年は問題毎の難易差が激しいセット。時間配分で差が大きく開いたはず。医学部は、一部共通、一部専用問題を指定される。ⅠAⅡB 色が強い傾向。 <b>頻出テーマ</b> ：整数、確率、軌跡・領域図示、座標と図形
筑波大・医 (120 分)	4 / 6	標準レベルや典型題が多く、類題演習量がものを言う出題。学科により指定問題が異なり、医学群は、後半 3 題から 2 題選択の計 5 題解答。ⅢC 色が強い。 <b>頻出テーマ</b> ：数Ⅲ微積分（不等式証明・求積）、行列と 1 次変換、2 次曲線と軌跡
東京医科歯科大 (90 分)	1 / 3	以前は計算量が膨大な出題が目立ったが、近年は難易度にバラつきがある。長い問題文や面倒な計算に対する粘り強さ、確かな論証力が合否を握る。 <b>頻出テーマ</b> ：数Ⅲ微積分、整数・数列・確率、図形（空間座標・ベクトル）
横浜市立大・医 (120 分)	3 / 6	05 年より、医学部は専用 <sup>1</sup> の出題形式に。例年 <sup>1</sup> が小問（今年は 3 問）、全体で 4 題。ⅢC 重視型。今年は典型題が目立ち、取り組みやすかった。 <b>頻出テーマ</b> ：数Ⅲ微積分、行列と論証、関数、整数・数列
群馬大・医 (120 分)	2 / 5	医学部は専用セット。例年、ⅠAⅡB 色が強い傾向。標準的な出題が多く、今年も高得点勝負は必至。まずは完答できる問題をしっかりと確保することが重要。 <b>頻出テーマ</b> ：整数・数列・場合の数などの個数の処理、関数、図形
名古屋大 (150 分)	2 / 4	4 年ぶりに選択問題がなくなる。難易度も標準的。漸化式を利用する問題が頻繁に出題される。長時間の分、計算量や手数も多く、粘り強く解く力が必要。 <b>頻出テーマ</b> ：確率・行列と漸化式、整数、微積分、図形、大小比較・不等式
大阪大 (150 分)	4 / 5	特に分野に対する偏りもなく、バランスの取れた出題が特徴。今年は計算量も難易度も適度なバラつきで、実力が反映されやすい出題。 <b>頻出テーマ</b> ：数Ⅲ微積分（面積・体積）、整数、図形、確率
京都大 (150 分)	2 / 6	問題文が短いのが特徴。07 年の難化以降、年度による難易差が激しい。今年は計算量が少なく、高得点勝負の様相。論証力がポイントになりやすい。 <b>頻出テーマ</b> ：微積分、整数、図形とベクトル

※ 特に断りのない大学は、医学部と他の理系学部で入試問題は共通。

※ 東北大学は農学部のみ 100 分 4 題、

※ 京都大学は理系において、教育学部、医学部人間健康科学科（看護学専攻・作業療法学専攻）のみ別セット。

<私立理系編>

大学 (試験時間)	ⅢC/全 問	2010 年度入試分析
慶應大・医 (100 分)	3 / 6	①が小問集、全体で大問 4 題。大半がマーク式、一部記述式。時間に対し計算量が多く、処理能力が問われる。発展的内容の知識が優位に作用する出題も目立つ。 頻出テーマ：長文の確率漸化式（必出）、数Ⅲ微積分、2 次曲線、行列
慶應大・理工 (120 分)	2 / 5	問題毎にマーク形式と記述式が異なる。今年は、確率、座標、微積分、ベクトル、数列といった傾向どおりの出題。計算量も標準的で、例年に比べて易化。 頻出テーマ：数Ⅲ微積分、数列、場合の数・確率、ベクトル
早大・理工 (120 分)	3 / 5	抽象的な数式処理が多いのが特徴。今年は確率、座標、微積分、1 次変換といった傾向どおりの出題。ただし、計算量が多く、時間配分が合否を分けたか。 頻出テーマ：数Ⅲ微積分、整数、場合の数・確率、数列
慈恵会医大 (90 分)	3 / 5	①が小問×3（三角比、確率、行列で A~B レベル）、穴埋め形式。②、③が記述式。今年は計算量が多く、09 年とは異なり、完答は狙えないセット。 頻出テーマ：数Ⅲ微積分（有名事実関連が多い）、確率、いろいろな曲線
日本医科大 (90 分)	1 / 3	例年の「難易順の出題」から傾向が変化。大問が 1 問減り、その分全体的に計算量も増えて難化。 頻出テーマ：数Ⅲ微積分、座標、図形
順天堂大・医 (70 分)	4 / 6	大半がマーク形式。例年、①が小問集。今年は計算量が多く、時間との戦いは必至。③は定義の導出・証明が近年必出。（今年は有理数の定義） 頻出テーマ：数列、いろいろな曲線、数Ⅲ微積分

<文系編>

大学 (試験時間)	2010 年度入試分析
東京大 (100 分・4 題)	今年も確率漸化式や、図形と数列の融合など、“目的に応じて各単元の基本知識を組み合わせる力”を問う出題。年度によっては問題ごとの難易差が大きく、見極めが大切。 頻出テーマ：確率、整数、図形、関数（特に値域・領域）
一橋大 (120 分・5 題)	全問記述形式。昨年難化したが、今年は例年のレベルに戻った。例年、整数・確率は必出。他には微積分、図形などが高頻度で出題される。論証力が問われることも多い。 頻出テーマ：確率、整数、微積分、図形
慶應・経済 (80 分・6 題)	3 問マーク、3 問記述形式。今年も領域の図示や帰納法、二項定理を用いた証明など、後半の記述は時間的にも論証的にも厳しい出題が多い。 頻出テーマ：指数・対数、ベクトル、微積分、数列、確率
早大・政経 (60 分・4 題)	マーク形式と記述形式の融合。問題の難易度は特にここ数年は基本問題の出題が多い。ただ、時間は短いので、素早くしっかりした答案を仕上げられることがカギになる。 頻出テーマ：場合の数・確率、整数（今年は出題されず）、数列

## 5. 実際の入試で求められるもの

実際の入試で出題される問題には、出題者の意図があります。ここからは、入試の際に求められる数学力について、少し具体的にご説明したいと思います。

### ▼発想力

入試で最も出題頻度が高く、また苦手とする生徒の多い単元として「確率」「整数」「図形」が挙げられます。また、今春のセンター試験の難化の主たる要因のひとつとして「図形問題が難しかった」という意見も多く見受けられます。これらの単元の鍵を握るのは、一般的には「発想力」や「数学的センス」といわれることが多いようです。

それでは「発想力」とは何なのでしょう？

それは主に「**着眼力**」と「**解法設計力**」だと考えられます。

### ・着眼力＝“経験に裏打ちされた感覚”

特に「確率」や「整数問題」「図形問題」では、問題を一読したときに、“着目すべきポイント”がわからず、「数式すら立たない」「見当違いな部分に着目して、全く役に立たない条件式しか立てられなかった」といった“与えられた状況・条件を数式化する”という、いわば“スタート段階”で煮詰まってしまう局面が多いようです。さらに、この類の問題は、スタート段階で有効な手法さえ思いつけば、あっさり解けてしまうことも少なくないので、逆に言えば、“スタート段階で手も足も出なかった”状態で解答を見ると、「この発想にいたる理由がわからない」「自分にはこの手の問題はたぶん解けるようにはならない気がする」となり、その単元自体に苦手意識を持ってしまうことになるのです。

このような“スタート段階”での局面を打破するには、状況を正確に分析し、解法の糸口を見つける力が必要です。

では、この類の問題が得意な生徒は、どうして解けるのでしょうか？彼らは、“限られた試験時間の間に”、しかも“全くのオリジナルの手法を”、唐突に思いついたのでしょうか？

そんなことはまずありえません。突き詰めていくと、過去の類題経験に基づいて、その手法をうまく組み合わせて応用しているに過ぎません。結局のところは、経験値の差なのです。

ただし、ここで重要なのは、経験の質です。

単に問題が解けた／解けなかったという結果のみにこだわるのではなく、「なぜこの解法で解けるのか？／解けないのか？」という具体的な理由にまで踏み込んで理解しなくては、次回以降にその経験を活かすことができません。

いわば“良質な経験”を数多く積むことで、数学的な視野は確実に広がり、知識も有用性が高まります。これこそが「着眼力」「数学的センス」の源なのです。逆に言えば、せっかくの良い問題を、十分な検証をしないことで無駄に通り過ぎてしまうことがとて

も多く、経験が有効に積み上げられるか否かは、その生徒の価値観によるところが実はとても大きいのです。「なんとなく解けた問題」よりも、「解けなかったが間違えた理由を深く理解した問題」の方が、その問題を通じて得られる「経験値」ははるかに大きいといえます。

これはよく生徒に話すことですが、「センス」という言葉の正しい訳は「感覚」です。何も、「生まれつきの天賦の才」のことを指す言葉ではありません。

例えば、「赤信号は危険だから立ち止まる」というみんなが持ち合わせている「感覚」は、生まれただの赤ちゃんにはありません。日常生活の経験に基づくものです。「数学的センス」も、このように経験に裏打ちされた“感覚”に過ぎません。

### ・解法設計力＝“知識を組み合わせる・使いこなす力”

大卒の決まっているセンター試験は別ですが、ほとんどの入試問題を解く際には、「具体的にどの単元の知識を活用すればよいのか？」を自ら選択することになります。

例えば、東大では「図形」に関する問題がよく出題されますが、図形問題に対する解法として利用可能な代表的“ツール”は「ベクトル・三角比・座標設定」が挙げられます。丁寧な参考書では、各ツールを利用した場合の解答例として、複数の解法を紹介しています。同じ解答に行き着くのであれば、当然一番処理が少なくて楽に解ける手法を選ぶべきです。難しい問題になればなるほど、この「解法の選択」の判断が難しいのです。

また、東大や慶應医学部で頻出の「確率漸化式」は、本来「数列」という単元で習得する「漸化式」の知識を「確率」の単元に応用した問題です。このように、複数の単元の知識を融合させて解く問題も数多く出題されます。

これらの問題は、「単なる基本例題・典型問題の丸暗記」では通用しません。

“ベストと思われる解法を選択し、それを組み合わせて解答にいたる道筋を自ら設計する”力が必要になります。

入試では、この能力を試す出題が非常に多く、また一番差がつきやすいのです。

「解法設計力」は、具体的には主に次の2つの要素から構成されます。

- ・各単元の基本知識について、それぞれの「手法の特性」を把握している。
- ・問題の求める最終的な到達地点を常に意識し、「目的意識」を持っている。

基本ツールのインストールを一通り終えてからでないと、「問題を解く際に、どのようにツールを組み合わせるのが効果的か？」という訓練は意味を持ちません。

GNOBLE では高校3年生の1年間を、より複合的で実戦に近い問題を継続的に取り扱っていくことで、この能力の育成に充てています。この最後の1年間の“実戦演習”を、より効果的にするためには、実は基本単元の知識の習得時に「どのように基本ツールをインストールされたか？」がとても大切です。

単に“知っている・覚えている”だけではなく、“使いこなせる”知識に昇華させるには、インストール時に、「手法の特性」(＝知識の有効な使いどころ)を十分意識した上で、知識を整理することが重要なのです。

## ▼数学的論述力＝“正しい表現で相手に伝える”

数学の試験における解答形式は、大別するとセンター試験や一部の私大入試に代表される「マークシート形式」と、国公立大の二次試験や一般入試で用いられる「記述形式」の2種類になります。

「記述形式」では、問題に対する解答を白紙の答案に論述していくことになりすから、数学的に正しい表現で、しかも採点者に伝わるように丁寧に、自らの考えを述べる力が必要です。

この力が受験生はなかなか育ちません。特に数学では、

- ・解法を説明する上で省略してはいけない言葉や途中式を書いていない。
- ・数値自体はたまたま当たっていても、実は途中の立式は全くの見当違いである。

などと言った、「正しいように見えるが論理的には不正確な答案」が数多く見受けられます。(自分では正しいと思って表現した) 答案を第三者がチェックしない限り、このような論理の不備には気づけませんから、「添削」が必要不可欠になります。

しかし、単なる計算問題の数値チェックだけではない、しっかりとした記述形式の答案を作り、しかもそれを添削してもらい、という機会は、「学校の定期テスト」や「大手予備校の模擬試験」くらいしかないのが現状でしょう。

一方で、いわゆる「添削教材」では、答案を作成した生徒と添削者とのやりとりは、今度は紙面のみになってしまいます。“減点された理由”について、答案に書かれた赤ペンの文字だけで常に納得できるとは限りません。実際、日々添削のやりとりに関する生徒からの質問はとて多いのです。

このように、「答案を作成する」→「第三者が添削する」機会をマメに設け、さらに不明な点に関しては質問ができる、という環境があつてはじめて「数学的論述力」の育成が可能になります。GNOBLEでは、授業担当者が添削を行っていますから、同じ生徒の答案を同じ添削者が一定期間担当するので、一人ひとりの生徒の傾向やクセにまで踏み込んだ効果的なアドバイスもできますし、全体に多いミスや傾向については、授業を通じて発信することができるのです。

## ▼計算力＝“修正力”

正しい数値を導き出すためには「計算力」が必要です。

計算ミスをしたときに、大抵の生徒は「どうしてミスをしたんだろう」と後悔をします。それでは、数学の得点能力の高い生徒は絶対にミスをしなんでしょうか？

決してそんなことはありません。どんな生徒でも、人間は必ずミスをします。いわゆる“優秀”な生徒たちほど、自らのミスに対して敏感なのです。彼らは自分のミスの傾向を知っていて、常に多角的に検算をし、実はその都度、ミスをすばやく自己修正しているのです。

つまり、ミスを防ぐのではなく「ミスに気づく力」こそが、正確な計算力の根源にあるのだと考えます。そのためには、解答・解法を一方的に受身の姿勢で見聞きしているだけではだめです。「まず、自分で解いてみる」→「正しい解法を確認し、自分の

方法と比較・分析する」という試行錯誤のサイクルの繰り返しがが必要です。「解きっぱなし」で、解答をしっかりとチェックしない勉強法は、まさに“百害あって一利なし”です。

また、ミスしやすい生徒とミスをしにくい生徒では、多くの場合その具体的な計算方法から差があります。ミスをしにくい効果的な計算手法や、自分が出した数値結果をすばやく確認する検算手法なども授業を通じて、随時紹介していきたいと思えます。

【文責】 1. 2. 3 : 纒田 邦浩  
4. 5 : 手塚 堅

## 1. 英語を読む

次の文章は、Apple Computer の創設者 Steve Jobs 氏が 2005 年 6 月、スタンフォード大学の卒業式で述べた祝辞の一節です。

Sometimes life hits you in the head with a brick. Don't lose faith. I'm convinced that the only thing that kept me going was that I loved what I did. You've got to find what you love. And that is as true for your work as it is for your lovers. Your work is going to fill a large part of your life, and the only way to be truly satisfied is to do what you believe is great work. And the only way to do great work is to love what you do. If you haven't found it yet, keep looking, and don't settle. As with all matters of the heart, you'll know when you find it. And, like any great relationship, it just gets better and better as the years roll on. So keep looking. Don't settle.

時として人生ではレンガで頭をかち割られるようなことが起きるものです。(しかし)信念を失ってはいけない。私を駆り立ててくれたのはただ一つ、自分のしていることが大好きだという気持ちだったと、私は確信しています。皆さんは自分が大好きなものを見つけなければいけない。それは仕事でも恋人でも同じように当てはまります。皆さんはこれから仕事が人生の大きな部分を占めていくでしょうが、自分が本当に心の底から満足を得たいなら進むべき道はただ一つ、自分が素晴らしいと信じる仕事をするだけです。そして素晴らしい仕事をしたければ進むべき道はただ一つ、自分のする仕事が好きであることです。まだ見つからないなら、探し続けること。落ち着いてしまっはけません。心の問題と一緒に、そういうのは見つかるどピンとくるものです。そして素晴らしい人間関係と同じように、年を重ねるにつれてどんどん良くなっていく。だから探し続けること。落ち着いてしまっはけません。

英語で文章を書いたり、英語で話をしたりするには**英語を発信する力**が必要ですが、それより前に、英語の文章が読め、英語を聞いて分かるという**受信する力**を身に付けていかねばなりません。ここで留意していただきたいのは、受信とは「読んで[聞いて]」意味が分かることであって、必ずしも「和訳することではない」ということです。例えば **This is my house.** のような文であれば、中1の夏を過ぎる頃にもなればイメージが脳裏に浮かび、和訳しなくても意味は分かるはずですが、しかし内容が抽象的になりイメージしづらくなると、日本語に置き換えた方が分かりやすくなります。冒頭の文章はテーマが生活に密着したもので抽象度が高いとはいえませんが、高校生になってから **GNOBLE** の門を叩く方のほとんどがこのレベルの英語が読めないのが実情です。以下のように読むのが **GNOBLE** 流で、授業の時にもこのように解説します。例として下線部を取り上げます。

**I'm convinced** 私は確信している(何を?) **that the only thing** 唯一のこと(どんなこと?) **that kept me going** 私を進ませ続ける **was** は…だった(何だった?) **that I loved** 好きだったということ(何を?) **what I did** 私のすることが .

和訳問題の答案としてこのまま解答欄には書けませんが、十分に受信できていることはお分かりいただけると思います。また、英語力が高まるにつれて、区切れ目は少なくなっていくます。

**I'm convinced** 私は確信している(何を?) **that the only thing that kept me going** 私を進ませ続ける唯一のことは(どんなこと?) **was that I loved what I did** 私のすることが好きだったということ .

要するに「英語を読む」には、以下のようにすれば良いのです。

**区切りを見つけて意味を捉え ⇒ 自然に湧いてくる疑問と共に ⇒ 左から右に読んでいく**



## 2. 英語を聞く

「読む」際には文末のピリオドに到って「あれ？(分からない)」と感じたら、時間は失いますが文の初めに戻って読み返すことが可能です。しかし、冒頭の一節は『祝辞』として語られたものでした。「英語を聞く」場合には、音は聞こえた刹那すぐに消えてしまいますから、前に戻ることはできません。英語の語順のまま受信する必要は一層高まります。(ただし、聞く場合には話し手が意味の切れ目で一瞬ポーズを入れますので、意味の切れ目を誤解する可能性は低くなります。もちろん、英語を聴き取る耳が鍛えられていることが前提の話ですが。)

## 3. 文法力と語彙力

さて、ここで問題が2つ生じます。1つは**どうすれば区切りを正しく見つけられるか**ということ、もう1つは**どうすれば区切りの内側の意味が分かるか**ということです。

「区切りを見つけて」と言うのは簡単ですが、英語を読めない人は区切りを正しく見つけられませぬ。例えば先ほどの下線部を

I'm convinced that the only thing that kept me going was that I loved what I did.

のように区切ってしまったらどうでしょうか？正しく受信できる見込みはゼロです。また、convince という動詞を知らなければ、I'm convincedの意味は分かりません。そこで、**文法力と語彙力**が必要になります。

### ▼文法力＝区切りを見つけ、区切り同士の関係を掴む力

GNOBLE では、特に中学生の間は**英文法**を重視していますが、それはテストの文法問題に正答するためというよりむしろ、**区切りを見つけて区切り同士の関係[構文]**を把握する力を培うためです。先ほどの下線部は、文法[構文]的には、I'm convinced<sub>(SV)</sub>に続くthat節が

- [<sup>①</sup>that the only thing<sub>(S)</sub> (<sup>②</sup>that kept me going) was<sub>(V)</sub> [<sup>③</sup>that I loved [<sup>④</sup>what I did]]<sub>(C)</sub>]<sub>(O)</sub>で
- ①that は接続詞。be convinced の目的語になる[名詞節]を導いている。
  - ②that は関係代名詞。先行詞である that 節内の主語<sub>(S)</sub>を修飾する(形容詞節)を導いている。
  - ③that は接続詞。that 節内の動詞<sub>(V)</sub>の補語になる[名詞節]を導いている。
  - ④what は関係代名詞。loved の目的語になる[名詞節]を導き、節内で did の目的語になっている。

のように(我々英語教師は)説明できますが、英語のネイティブはいちいちこのような分析をしながら読んでいたわけではありません。それは、我々日本語のネイティブが日本語の文法を意識せずに日本語を運用しているのと同じことです。

ここで気をつけなければいけないことがあります。それは、**ネイティブは文法を意識していないだけであって、文法をしっかりと身に付けているのだ**という事実です。日本語のネイティブであれば、「『動く』という動詞は五段活用する動詞だから、『ない』に接続するときには未然形の『動か』という活用形を用いるのだ」などと分析することなく、「『動かかない』は正しいが『動くない』は間違いだ」と瞬時に判断できますが、それは、文法が身に付いているからできることなのです。

GNOBLE では**英文法**を身に付けるために、中学生テキストの基本例文＝Sentences for Workoutを全て\*GSL 化し、\*Workout を通じて意識せずに運用できるように指導しています。以下の英文は全て Sentences for Workout からの抜粋です。\*GSL と\*Workout については本資料の4. と5. で説明します

①that: We are happy **that** you saw your mother again. 【中1E4 タームテキストより】

②that: The novel **that** was written by the writer won the prize. 【中2夏期講習テキストより】

③that: My first impression was **that** he was really funny. 【中3夏期講習テキストより】

④what: I don't believe **what** you've just said. 【高1G4 タームテキストより】

Workout によって以上の文法事項をしっかりと身に付けている生徒は、I'm convinced **that** the only thing **that** kept me going was **that** I loved **what** I did.を切れ目を見つけながら、返り読みすることなく、一度で意味を捉えることが可能です。

(英語科資料の最後に『参考資料2』としてここで引用した GNOBLE 英語テキストの文法説明部分を抜粋してあります。また、引用文中の下線部は、難しい語は1つありませんが、正確に意味を捉えるにはしっかりと文法力が必要です。読み書きに必要な文法力の有無を確認したい方には、指標としてお読みいただけます。)

### ▼語彙力＝区切り内の意味を捉える力

GNOBLE では中3から大学入試レベルの長文を読み始めます。文法を習得している生徒でも、英文の中に知らない語がたくさん出てきます。**語彙の壁**にぶつかるわけです。

未知の語があっても文脈から想像することは可能ですし、そうすることは非常に大切です。しかし一文の中に3つも4つも意味の分からない語があれば、想像するにも限界があります。そこで、相談に来る生徒がいます。「先生、単語がわからないから長文が読めません。市販の単語集を買って覚えようと思うのですが、どの単語集がおススメですか？」我々は回答します。「単語集で英単語と日本語訳を一対一対応で暗記するようなことはしないでください。板書で説明した語彙解説を写した『**語彙ノート**』を作って頻繁に目を通し、英語の本文を**音読**の Workout(後述)で頭に沁みこませてください。辞書を引いたら、必ず**語源**の説明を読むようにしてください」と。

漢字を「偏(へん)や旁(つくり)」を組み合わせると意味が類推できるのと同じように、英語の語も、『**接頭辞**＋**語根**＋**接尾辞**』の組み合わせで**意味をイメージ**することができます。例として、**dict**という**語根**と**接頭辞**・**接尾辞**の組み合わせを挙げます。【 】内が意味のイメージ、「 」内が訳語です。

dictate = **dict** 言う＋ate…させる ⇒ 【言いつける;言って書き取らせる】「命令する;書き取らせる」

>dictator = dictate＋or…する人「独裁者,権威者;口述者」

>dictation = dictate＋ion 名詞語尾 「指図,指令;書き取り」

diction = **dict** 言う＋ion 名詞語尾 ⇒ 【言うこと,言い方】「言葉づかい,言いまわし」

>dictionary = diction＋ary…に関する場所 ⇒ 【言いまわしが収録されている場所】「辞書」

predict = pre 前もって＋**dict** 言う ⇒ 【前もって言う】「予言する」

>prediction = predict＋ion 名詞語尾 「予言」

contradict = contra 反対に＋**dict** 言う ⇒ 【反対を言う】「反論する;矛盾する」

>contradiction = contradict＋ion 名詞語尾 「反論;矛盾」

>contradictory = contradict＋ory 形容詞語尾(…の性質がある)「反抗的な;矛盾した」

先の下線部に出てきた convince であれば、GNOBLE の授業ではどの講師も、**接頭辞 con** 全く、すっかり＋**語根 vince** 征服する ⇒ 【完全に(精神的に)征服する→思い込ませる】「納得させる,確信させる」のように板書して、同じ**語根**を含む convict, victory, victor, invincible などにも言及します。

高校生にもなると生徒は電子辞書を持ち歩くようになりますが、電子辞書に入っている英和辞典はほとんどが大修館書店の『ジーニアス』です。『ジーニアス英和辞典』(第4版)で convince を引くと見出し語と発音記号のすぐ後に、【原義:完全に(con)征服する(vince)→説得する。[派]→conviction(名)】と説明されています。その兄貴分に当たる『ジーニアス英和大辞典』を引くと、【初16C;ラテン語 convincere(征服する)より. con(完全に)＋vince(征服する). convictと同語源. cf.

victory, victor】と、より詳しく解説されています。また、三省堂の『ウィズダム英和辞典』（製本されている辞書を購入すると、無料でウェブ版が利用できます）では

**con・vince** <sup>\*</sup> /kənˈvɪns/ 【音声】 [con(完全に)vince(征服する)] ((名)conviction, (形)convinced, 以下省略…

と出ています。英和辞典を引いたらこれらの説明を読むのを習慣にすることが必要です。

単語集で単語を覚えようとする試みは、泳げない人が、泳ぐのに必要な筋肉をウェイトトレーニングをして鍛えようとするようなものです。効果が全くないとまでは言いませんが、それが泳げるようになることには直に結びつきはしません。泳げるようになるには、泳いでみるしかないのです。泳いでいる(=英語を読んでいる)内に、泳ぐのに必要な筋肉(=語彙力)は自然と身に付いてゆきます。

#### 4. GSL[GNOBLE Sound Laboratory=グノーブルの音声による演習]



GNOBLE の授業では英語の仕組みを**理解**してもらおうことをとても大切にしていますが、英語はコトバですから、理解したことを**身に付ける**訓練をしなければいけません。そのトレーニング[ワークアウト]をするために、6 学年全てに **GSL** という音声教材を導入しています。中学生は文法テキストの基本例文[Sentences for Workout]の音声を、高校生は長文の音声を、ウェブサイトで配信しています。暗証番号を入力して、MP3 形式で音声を簡単にダウンロードできます。

中学生には、Sentences for Workout の基本例文を**何度も聴いて音読し、暗誦できるくらい親しんでくる**という宿題を全学年・全クラスで課しています。翌週の授業の最後にその中から 3 本の英文を放送して書き取らせ、定着度を確認します。これによって英語の音を聴き取る力がついていくだけでなく、理解できたことが身につく、語彙も自然に増えていきます。

高校生には**長文の音声を配信し、授業で解説を聞いたのでしっかりと理解できている長文を繰り返し聴き、何度も音読する**ように指導しています。音読すると返り読みができないので、英文の意味を前からカタマリごとに捉えていくことができるようになります。このやり方でスラスラ音読できる長文を一つ一つ増やしてゆくと、初見の長文でもかなりのスピードで読めるようになります。

#### 5. 受講効果を上げるために

##### ▼休まず・遅れず

英語の授業は中1から高1までは年間に **50 回**です。受講して伸びる生徒は欠席も遅刻もせずに【宿題⇒授業⇒復習…】のサイクルを生活に組み入れている方です。【授業】を**休むと**、授業中の緊張感を持った演習ができず、演習後の痒いところに手が届く解説を聞けなくなるだけでなく、その前後の【宿題…復習】の**学習サイクル全てを失う**こととなります。中学生であれば、新出単元の導入授業も受けられなくなります。また、部活など理由はあるのですが、遅れてくるのも感心しません。5 分でも遅刻するなら、振替授業に出席することをお勧めします。

##### ▼宿題と復習

英語科では、中1から高3の全てのクラスで毎週一定量の宿題を出しています。問題を解いたり、提出する英作文を書いたりといった宿題には、毎週取り組んでいただかなければなりません。これをやらずに漫然と授業に参加しているだけでは、英語力の向上は望めません。

宿題をしっかりとやるのは最低限のことで、英語力が伸びるかどうかは **Workout** を継続して行うことにかかっています。生徒の皆さんには繰り返し指導していることですが、確認のため掲載します。

▽中学生のワークアウト:小ターム毎に配付するテキストの巻頭に記してある以下の勉強方法を、

継続して行ってください。それで英語の基礎力は万全になります。

—— 授業で「理解」したことを「身に付ける」ための具体的なトレーニング [Workout] ——

- ① **Listening**[聴き込み]: 授業で理解した例文を、テキストを見ないで繰り返し聴く(回数は全ての文が完全に聴き取れるまで)。電車の中での時間も利用する。
  - ② **Retention/Shadowing**[口まね]: **Retention** は、英文一本を丸ごと聴き取った後で、まねて発声する練習方法。**Shadowing** は、聞こえた英語をすぐさままねて発声する。
  - ③ **Reading aloud**[音読]: ②の **Workout** で耳に残っている音を利用して、テキストを見ながら一文を音読する。目安は一文につき 5 回。
  - ④ **Recitation**[暗誦]: ③の **Workout** の後すぐに、テキストは見ないで声を出して暗誦する。目安は一文につき 10 回。
  - ⑤ **Dictation**[書き取り]: ④が終わった後、日を改めて行う。英文一本が流れ終わったら、丸ごと書き取る。書き取ったものをテキストと照合して、つづりの間違いなどがなく確認する。
- 以上の **Workout** が終わったあとで、宿題として出されているテキストの問題を解いてください。必要なことが頭に入っているの、スラスラと解けるはずですよ。

▽**高校生のワークアウト**: 読解問題に関しては、以下のワークアウトを継続して行ってください。

- ① **Listening**[聴き込み]: 授業で理解した **GSL** 対応の長文を題材にする。
  1. 音声を聞きながら、意味を意識しつつ目で英文を追いかける。慣れるまで繰り返す。
  2. 意味を意識しながら、繰り返し音声を聞く。(以上は電車の中での時間も利用する。)
  3. 音声を聞き、目で英文を追いかけて、まねして声を出す。口がうまく回るまで繰り返す。いずれの場合も、意味の切れ目を意識し、切れ目ごとに意味をイメージする。
- ② **Reading aloud**[音読]: 授業で理解した長文を題材にする。スラスラ読めるようになるまで音読する。目安は最低 10 回。音読の効用は、具体的には以下の三点です。
  1. 声に出して読むと左から右にしか読んでいけない[右から左へのいわゆる「返り読み」ができない]ので、英文の情報を「表現の持つ意味の単位で区切って、出てくる順番に頭の中に入れる」ことができるようになる。= **1 回読んだだけで分かる力がつく!**
  2. 声に出して読むと日本語に置き換えることができないので、英文の意味を英語のまま捉えられるようになる。= **速く読める力がつく!**
  3. 「目」だけでなく「口」と「耳」も使っているので、文法や語彙が記憶に残りやすくなる。  
= **英語力そのものが向上する!**

## 6. 今後について

### ▼中1

#### ▽クラス分けテスト

E1 ターム 3 回目に実施したクラス分けテストの平均点は 55.8 点でした。新クラスの点数の切れ目は、αクラス:70 点以上、α1クラス:69 点~37 点、α2クラス 36 点以下となります。

冬期講習明けの F1 タームの授業内で次のクラス分けテストを行う予定です。春期講習からの新学年のクラスを決めるテストになりますので、当面の学習目標にいただければと思います。

#### ▽冬期講習

全 4 回の冬期講習では、第 1 日:動詞と時制①、第 2 日:動詞と時制②、第 3 日:助動詞、第 4 日:比較の順に授業を行います。通常授業を受講している皆さんにとっては、単元としては全て復習となりますが、毎回、新しい発展的な事項も学習することになります。

#### ▽冬期講習以降

F1 タームの 3 回は「不定詞入門」で、不定詞の副詞用法(目的と原因)と名詞用法を学びます。

F2タームの4回は「文型入門」で、品詞と文の要素と5文型を学習します。新中2の春期講習で「現在完了」を導入して時制を一通り学び終えた後、G1タームより「準動詞」の本格的な学習が始まります。

我々講師の側から見ますと、英文法がしっかり習得できるかどうかの分水嶺となる大きな山が五つほど存在します。いわゆる『臨界期』(脳の言語回路が固定化する時期)以降、外国語として英語を学ぶにあたっては、この五つの山を順番通りに一つずつ、乗り越えてゆかねばなりません。

一つ目の山は「be動詞の文と一般動詞の文の区別」で、それぞれについて否定文や疑問文・疑問詞を用いた疑問文に変形できる力が必要です。この山は中1の間に越えなければいけません。二つ目の山が「準動詞」の山で、不定詞・動名詞・分詞が、動詞の性質を残しつつも、文中では他の品詞の働きをすることをしっかりと理解した上で、自在に使えるレベルまで習熟することが大切です。この山は、基本事項については中2の間に、応用的な分詞構文などについては中3の間に越えたいものです。三つ目の山は接続詞・関係詞を用いた「複文」の山で、ここまでの山々を越えた人は、続く「仮定法」の山と「これらの組み合わせに習熟する」山は、比較的楽に越えることができます。

GNOBLEでは中2の夏前に三つ目の山まで一通り導入が終わりますが、生徒が習得するまで時間がかかります。しっかりと身につくまで、繰り返し復習していただきます。

来年度の新中2の通常授業は、今年度の中1同様、月曜(渋谷)、火曜(新宿)、土曜(新宿)で開講の予定です。

## ▼中2

### ▽クラス分けテスト

E1ターム3回目に実施したクラス分けテストの平均点は61.1点でした。新クラスの点数の切れ目は、 $\alpha$ クラス:79点以上、 $\alpha$ 1クラス:78点~54点、 $\alpha$ 2クラス53点以下となります。

冬期講習明けのF1タームの授業内で次のクラス分けテストを行う予定です。春期講習からの新学年のクラスを決めるテストになりますので、当面の学習目標にしていいただければと思います。

### ▽冬期講習

全4回の冬期講習では、『中学英語の完成』と題して、第1日:動詞とその周辺、第2日:不定詞・動名詞、第3日:分詞・関係代名詞、第4日:比較他の順に授業を行います。通常授業を受講している皆さんにとっては、単元としては全て復習となりますが、豊富な文法の演習だけでなく、読解の演習も合わせて行います。

### ▽冬期講習以降

F1タームの3回は「関係副詞・前置詞」で、普通は高校で学ぶ関係副詞を学習し、授業内で初めて前置詞を体系立てて扱います。F2タームの4回は「文型—復習と応用—」で、5文型の復習と、S+V+O+Cの文でCに原形不定詞が来る形まで全て学習します。

来年度の新中3の通常授業は、今年度の中2同様、水曜と土曜(ともに新宿)で開講の予定です。

## ▼中3

### ▽クラス分けテスト

E1ターム3回目に実施したクラス分けテストの平均点は41.8点でした。新クラスの点数の切れ目は、 $\alpha$ クラス:60点以上、 $\alpha$ 1クラス:59点~41点、 $\alpha$ 2クラス40点以下となります。

冬期講習明けのF1タームの授業内で次のクラス分けテストを行う予定です。春期講習からの新学年のクラスを決めるテストになりますので、当面の学習目標にしていいただければと思います。

## ▽冬期講習

$\alpha$ と $\alpha$ 1クラスでは、既にセンター試験レベルの読解問題を扱っていますが、この冬期講習は全クラスで『大学受験に向けて高校レベルの読解力養成』と題して、読解に特化した授業を行います。GSLの音声も、長文読解問題の配信となります。GNOBLE 流の「前から読んでいく」を徹底して行い、大学入試レベルの語彙もたくさん学んでいただきます。

講習本科では読解しか扱いませんので、特別講座としてこの冬も\*EGGS を開講します。EGGS は、4 日間で英語力の基盤となる英文法を全て学習しようという講座です。365 本の基本例文を GSL 配信します。

\*EGGS: English Grammar Green Session for newcomers「新入生のための基礎英文法講座」。高校生から GNOBLE の門を叩く方の相当数が、英文法のベースがないために入室テストで不合格になっており、それを打開するために 2009 年度の中3冬期講習で初開講。2010 年度は、新高1と新高2の春期講習と、この中3冬期講習で開講。2011 年度は、新高1と新高2の春期講習、中3の冬期講習で開講予定。

また、F タームに、EGGS 受講者を対象に、EGGS で学んだことの定着を図る 7 回の講座を開講する予定です。EGGS の授業内でご案内しますので、「自分一人ではなかなか復習できない」という方の積極的な御受講をお待ちしております。

## ▽冬期講習以降

F1 タームの 3 回は「複合関係詞・強調・倒置」、F2 タームの 4 回は「(高校範囲の)比較表現」です。これで、高校範囲まで文法事項は全て一通り学習し終えて、春期講習から高校生です。

来年度の新高1の通常授業は、今年度の中3同様、水曜と木曜に開講の予定です。水曜日は全クラス新宿、木曜日は全クラス渋谷での授業を予定しております。

## ▼高1

### ▽クラス分けテスト

E1 ターム 3 回目実施したクラス分けテストの平均点は 29.1 点でした。新クラスの点数の切れ目は、 $\alpha$ クラス:45 点以上、 $\alpha$ 1クラス:44 点~30 点、 $\alpha$ 2クラス:29 点~20 点、新設の  $\alpha$ 3クラス:19 点以下となります。(新設の月  $\alpha$ 3、木  $\alpha$ 3、金  $\alpha$ 3クラスはいずれも 19:15~21:15 に新宿での授業です。)

冬期講習明けの F1 タームの授業内で次のクラス分けテストを行う予定です。春期講習からの新学年のクラスを決めるテストになりますので、当面の学習目標にしていただければと思います。

### ▽冬期講習

第 1 日の授業内でテキストを配付します。テキストの単元割は E タームの復習となる『比較表現・仮定法・接続詞・前置詞』です。毎回、プリント演習⇒添削⇒解説を通常授業同様に行います。

### ▽冬期講習以降

F1 タームの 3 回は「否定表現」、F2 タームの 4 回は「特殊構文」です。春期講習からの高2の授業で、文法単元をもう一巡しますが、読解の方に軸足が移せるように、文法はなるべく早く習得し終えたいものです。

来年度の新高2の通常授業は、今年度の高1同様、月曜・木曜・金曜に開講の予定です。現在  $\alpha$ と $\alpha$ 1クラスがない木曜にも  $\alpha$ と $\alpha$ 1クラスを開講します。現在渋谷で開講している月  $\alpha$ 2クラスは、来年度は新宿で開講の予定です。(従って新高2英語の渋谷での開講は月  $\alpha$ と月  $\alpha$ 1のみとなります。)

ご理解を賜りたく、お願い申し上げます。

(以上本編)

## ▼参考資料1:GNOBLE 英語科カリキュラム

### ▽中1:小ターム[G1 など]ごとに1冊のテキストを配付(⇒の直後はテキストタイトル)

- 春期講習(4回): スタートダッシュ講座 ⇒アルファベット/スペリングと発音の関係/基本ワード/センテンスの成り立ち  
G1 ターム(3回) ⇒be 動詞の文: am, are, is の使い分け 主格と所有格 冠詞  
G2 ターム(4回) ⇒疑問詞・複数形・There 構文: 疑問詞を使う疑問文 (代)名詞の複数形 存在文 数量形容詞  
G3 ターム(3回) ⇒一般動詞の文: have like, play, study 等 三人称単数 否定文と疑問文 命令文 Let's ~  
G4 ターム(3回) ⇒非人称の it・助動詞入門: 非人称の it 助動詞 can, may, must, shall  
夏期講習(8回): 動詞1/動詞2/動詞総合/命令文/疑問詞1/疑問詞2/助動詞/現在進行形  
E1 ターム(3回) ⇒動詞の過去形: be 動詞の過去形 一般動詞の過去形(規則変化と不規則変化)  
E2 ターム(4回) ⇒感嘆文・未来の文: 感嘆文 will と be going to  
E3 ターム(4回) ⇒比較入門: 形容詞・副詞 原級を用いる比較 比較級を用いる比較 最上級を用いる比較  
E4 ターム(3回) ⇒接続詞入門: 等位接続詞 副詞節を導く従位接続詞(because, when, if 等) 名詞節を導く that  
冬期講習(4回): 動詞と時制1/動詞と時制2/助動詞/比較  
F1 ターム(3回) ⇒不定詞入門: 副詞用法(目的と原因) 名詞用法(S と C と O)  
F2 ターム(4回) ⇒文型入門: 品詞 文の要素・句と節 SV, SVC, SVO SVOO, SVOC

中1のE4まではひたすら文法を学習します。冬期講習から読解を導入します。  
授業の最初の演習プリントと最後の dictation のお帰り問題で、定着度を確認しています。

### ▽中2:小ターム[G1 など]ごとに1冊のテキストを配付(⇒の直後はテキストタイトル)

- 春期講習(4回): 動詞と文型/助動詞・時制/現在完了入門(前編)/現在完了入門(後編)  
G1 ターム(3回) ⇒不定詞・動名詞: 名詞用法の不定詞 動名詞 形容詞用法の不定詞 副詞用法の不定詞  
G2 ターム(4回) ⇒文型: SV, SVC, SVO, SVOO, SVOC  
G3 ターム(3回) ⇒受動態入門・現在完了・接続詞: 受動態入門 現在完了 接続詞  
G4 ターム(3回) ⇒関係代名詞と分詞入門: 主格の関係代名詞 目的格の関係代名詞 分詞の形容詞用法  
夏期講習(8回): 文型/不定詞1/不定詞2/動名詞・分詞/受動態/現在完了/比較/関係代名詞  
E1 ターム(3回) ⇒準動詞: 名詞の働き 形容詞の働き 副詞の働き(初出の\*分詞構文を含む)  
E2 ターム(4回) ⇒接続詞: 相関接続詞や名詞節を導く if, whether を含む  
E3 ターム(4回) ⇒疑問文: 修辭疑問 付加疑問 間接疑問  
E4 ターム(3回) ⇒関係代名詞: \*what と\*非制限用法を含む(初出)  
冬期講習(4回): 中学英語の完成: 動詞とその周辺/不定詞・動名詞/分詞・関係代名詞/比較他  
F1 ターム(3回) ⇒関係副詞・前置詞: \*関係副詞初出 前置詞を体系立てて扱う  
F2 ターム(4回) ⇒文型—復習と応用—: \*原形不定詞初出

中2G4で「文科省学習指導要領中学範囲」が一通り修了。テキストやプリントで毎回読解を扱います。  
Eターム以降は復習をしながら高校範囲の文法事項(\*付きの事項)へと踏み込んで行きます。  
授業の最初の文法演習プリントと最後の dictation のお帰り問題で、定着度を確認しています。

**▽中3:小ターム[G1 など]ごとに1冊のテキスト(前半は文法テーマ別・後半は出題形式別)を配付**

春期講習(4回): 不定詞/動名詞・分詞/受動態・現在完了/関係詞

G1 ターム(3回) ⇒ 文法テーマ別: 品詞と文の要素・文型 出題形式別: 文法・語彙・読解

G2 ターム(4回) ⇒ 文法テーマ別: 名詞相当語句 出題形式別: 文法・語彙・読解

G3 ターム(3回) ⇒ 文法テーマ別: 形容詞相当語句 出題形式別: 文法・語彙・読解

G4 ターム(3回) ⇒ 文法テーマ別: 副詞相当語句 出題形式別: 文法・語彙・読解

夏期講習(8回): 不定詞/動名詞・分詞/受動態/完了形/関係詞/接続詞/話法/前置詞

E1 ターム(3回) ⇒ 文法テーマ別: 助動詞(法助動詞全て 助動詞の過去形) 出題形式別: 文法・語彙・読解

E2 ターム(4回) ⇒ 文法テーマ別: 完了形(完了時制全てと準動詞の完了形)と SVOC の文 出題形式別: 文法・語彙・読解

E3 ターム(4回) ⇒ 文法テーマ別: 仮定法 出題形式別: 文法・語彙・読解

E4 ターム(3回) ⇒ 文法テーマ別: 分詞構文 出題形式別: 文法・語彙・読解

冬期講習(4回): 大学受験に向けて高校レベルの読解力養成

F1 ターム(3回) ⇒ 文法テーマ別: 複合関係詞・強調・倒置 出題形式別: 文法・語彙・読解

F2 ターム(4回) ⇒ 文法テーマ別: 比較表現 出題形式別: 文法・語彙・読解

中3では全クラスで授業内に毎回、和訳問題などの添削を行っています。

大学入試の読解問題を扱い始め、F2までに高校範囲の文法事項を一通り修了します。

授業の最後の Sentences for Workout の dictation は、中学生最後の授業まで行い続けます。

**▽高1:小ターム[G1 など]ごとに2冊のテキスト(Grammar & Writing と Reading & Listening)を配付**

春期講習(4回): フレッシュャーズ講座(読解・リスニング・作文・文法)

G1 ターム(3回) ⇒ Grammar & Writing 1: 不定詞 Reading & Listening 1

G2 ターム(4回) ⇒ Grammar & Writing 2: 動名詞・分詞 Reading & Listening 2

G3 ターム(3回) ⇒ Grammar & Writing 3: 分詞構文 Reading & Listening 3

G4 ターム(3回) ⇒ Grammar & Writing 4: 関係代名詞 Reading & Listening 4

夏期講習(8回): 不定詞・動名詞・分詞・分詞構文・関係代名詞・関係副詞・複合関係詞

E1 ターム(3回) ⇒ Grammar & Writing 5: 比較表現 Reading & Listening 5

E2 ターム(4回) ⇒ Grammar & Writing 6: 仮定法 Reading & Listening 6

E3 ターム(4回) ⇒ Grammar & Writing 7: 接続詞 Reading & Listening 7

E4 ターム(3回) ⇒ Grammar & Writing 8: 前置詞 Reading & Listening 8

冬期講習(4回): 比較表現・仮定法・接続詞・前置詞

F1 ターム(3回) ⇒ Grammar & Writing 9: 否定表現 Reading & Listening 9

F2 ターム(4回) ⇒ Grammar & Writing 10: 特殊構文 Reading & Listening 10

高1になると GSL が長文の音声になり、お帰りに問題の dictation も、長文の穴埋め問題です。

英作文の添削指導を全クラスで行っています。

高2(春期から E4 まで全 39 回)で高1の学習範囲を更に深めつつもう一度学習します。テキストは高1同様、Grammar & Writing と Reading & Listening (GSL 対応)の2本立てです。夏期講習か



らどのクラスでも「要約問題」に取り組むようになります(授業内で添削後、解説します)。

高3(高2の冬期講習から【読解】と【作文・文法】各46回)になると、授業が【読解】と【作文・文法】に別れ、それぞれ2時間行きます。どちらの授業でも毎回 Workout すべき GSL を配信し、相当量の宿題[テキスト]と演習[プリント]、添削[要約や英作文]を通じて、万全の英語力を養います。

▼参考資料2: GNOBLE テキスト文法説明部分(太字になっている例文は本編3. で引用)

### 【中1E4 ターム『接続詞入門』より】

#### Section 3 that



—Sentences for Workout—

- 01 We know that she is from Okinawa.  
…途中省略…
- 08 **We are happy that you saw your mother again.**
- 09 I'm afraid you can't come with me.
- 10 Are you sure that he will win the race?

- 
- 01 彼女が沖縄出身であることを私たちは知っています。  
…途中省略……
  - 08 あなたが再びお母さんに会えて、私たちはうれしい。
  - 09 あなたは私と来ることができないだろうと(残念ながら)思います。
  - 10 彼がそのレースに勝つと確信していますか。

中1テキストの文法説明部分は Sentences for Workout とその和訳のみです

### 【中2夏期講習—Day 8『関係代名詞』より】

#### Section 1 主格の関係代名詞



—Sentences for Workout—

- 01 I know the man who came to see you.
- 02 The man who came to see you was American.
- 03 Do you know anyone who has seen a ghost?
- 04 Anyone who has seen a ghost can become a member.
- 05 The boy that is playing tennis is my classmate.
- 06 The boys that are playing tennis are my classmates.
- 07 This is the dog which bit me.
- 08 The dog which bit me was Bob's.
- 09 I went to the supermarket which opened last week.
- 10 The supermarket which opened last week stays open until midnight.
- 11 I'm looking for a novel that was written by the writer.
- 12 **The novel that was written by the writer won the prize.**

- 01 私はあなたに会いに来たその男性を知っている。
- 02 あなたに会いに来たその男性はアメリカ人でした。
- 03 幽霊を見たことがある人を誰か知っていますか。
- 04 幽霊を見たことがある人なら誰でも会員になることができます。
- 05 テニスをしているその男の子は私のクラスメートです。
- 06 テニスをしているその男の子たちは私のクラスメートです。  
…途中省略…
- 12 その作家によって書かれたその小説は、賞を受賞しました。

中2テキストの文法説明部分は Sentences for Workout とその和訳のみです

### 【中3夏期講習—Day 6『接続詞』より】

#### Section 4 名詞節を導く従位接続詞



—Sentences for Workout—

- 01 That he is honest is quite certain.
- 02 It's surprising that you have finished the work so soon.
- 03 It's true that life in the city is convenient, but I prefer to live in a quiet place.
- 04 **My first impression was that he was really funny.**
- 05 The dictionary is really helpful, but the only trouble is that it has a few printing errors.
- 06 Do you know that he has been in a hospital?
- 07 I think I've met you before, but I can't remember your name.
- 08 I'm afraid that I will not be free until the examination is over.
- 09 Many people don't accept the fact that they are equal.
- 10 She asked if I felt better.
- 11 She looked around to see if anyone was watching her.
- 12 I don't know whether he will come or not.
- 13 Whether he is rich or poor doesn't matter to me.

- 01 彼が正直者であることはかなり確実だ。
- 02 その仕事をあなたがそんなにもすぐに終わらせたことは驚きです。
- 03 都会での生活は便利なことは事実ですが、私は静かな場所に住むことを好みます。
- 04 私の最初の印象は、彼は本当に愉快的な人間だということでした。
- 05 その辞書は本当に便利ですが、唯一の問題は、2、3の誤植があることです。
- 06 彼が入院しているのを知っていますか？
- 07 私は以前、あなたに会ったことがあると思うのですが、名前を思い出せません。
- 08 おそらく、私は試験が終わるまで暇にはならないでしょう。
- 09 多くの人間が、自分たちは平等であるという事実を受け入れない。
- 10 私の気分が良いかどうか、彼女は尋ねた。
- 11 誰かが彼女を観察しているかどうか確かめるため、彼女はあたりを見渡した。
- 12 彼が来るかどうか私には分からない。
- 13 彼が金持ちか貧乏かということは、私には問題ではない。

中3テキストの文法説明部分は、Sentences for Workout とその和訳のみです

## 【高1G4 ターム『関係詞』より】

### Section 6: 関係代名詞—what—

—Sentences for Workout—

- (1) What is important is to do it for yourself.
- (2) This is what everyone wants to know.
- (3) **I don't believe what you've just said.**
- (4) Concentrate your attention on what you are doing.
- (5) She is not what she used to be.
- (6) My sister is interested in what is called pop music.
- (7) He is a great politician, and, what is more, a good scholar.
- (8) Reading is to the mind what food is to the body.

- (1) 大事なことはそれを自分の力でやることです。
- (2) これが、皆が知りたがっていることです。
- (3) 私はあなたがたった今言ったことが信じられない。
- (4) 自分のしていることに、注意を集中させなさい。
- (5) 彼女は、以前の彼女ではない。
- (6) 私の姉はいわゆるポップミュージックに興味がある。
- (7) 彼は偉大な政治家で、そしておまけに、優れた学者だ。
- (8) 読書と精神との関係は、食べ物と肉体との関係に等しい。

関係代名詞の **what** は先行詞をその中に含んでいるので先行詞なしで用いる。(よって、制限用法しかない。) **the thing(s) which** に相当することが多い。例えば①Show me **the thing which** you have in your hand.「あなたが手の中に持っているものを見せなさい。」は②Show me **what** you have in your hand.と同じである。それぞれの文で関係詞が導く節は以下ようになる。

- ①Show me the thing<sub>(Ⓢ)</sub> (**which** you have in your hand). ⇒ **which** が導くのはⓈを修飾する形容詞節
- ②Show me [**what** you have in your hand]. ⇒ Ⓢをその中に含む **what** が導くのは名詞節

▼関係代名詞の **what** は名詞節を導くので、**what** 節は文中で名詞と同じ働きをする。

- (1) [**What** is important]<sub>(S)</sub> is to do it for yourself.
- (2) This is [**what** everyone wants to know]<sub>(C)</sub>.
- (3) I don't believe<sub>(Ⓢ)</sub> [**what** you've just said]<sub>(O)</sub>.
- (4) Concentrate your attention on<sub>(Ⓢ)</sub> [**what** you are doing]<sub>(O)</sub>.

**注意** Tell me **what** you want. の **what** は関係代名詞と疑問詞の両方の解釈を許す。関係代名詞なら「君が欲しいものを私に教えて」となり、疑問詞なら「君が何を欲しいかを私に教えて」の意味になる。後者は疑問詞が導く名詞節[間接疑問]である。(以下省略…)

高校生の文法テキストに解説があるのは、授業で導入からの説明はもう行わないためです。  
高校生の Sentences for Workout の英文は8割方 GNOBLE の中学生テキストから採っています。

【メモ欄】